

本書は、欧州呼吸器学会(ERS)からモノグラフシリーズの近刊として、2人の女性呼吸器病学者によって刊行された。本書は、表題からして、多くの医師や研究者の関心を惹くには、時期尚早というのがおおかたの見かたであろう。ここで、「多く」のというのは、わが国では、女性だけを切り取って科学することや、ある疾患の焦点を性差にしばってしまうことは、まだ、十分にその意義が合意されていないからである。

欧米でもわが国でも、種々の疾患に対するガイドラインが作成されている。すでに発表された知見と専門家の合意に基づいて作成された診断と治療方針に、一定の方向性が示されつつあることはよろこばしいことである。一般臨床においても、専門外来においても指標となる資料として利用されるであろう。

しかし、ガイドラインのなかで整理された知識といえども、さらなる問題が潜んでいるものである。例えば、原因不明の間質性肺炎については、その整理が国際的共同作業として行われ大きな成果が収められている。しかし、膠原病や喫煙に関連して起こる間質性肺疾患については、診断と治療、予後に関連してまだまだ不明瞭な部分が多い。膠原病、薬剤、喫煙に関連した間質性肺疾患では、性差は、診療行為のなかで大きな意味をもつと感じるのは私だけではないはずである。特に、現在の治療指針は、過去の知見に基づいて記載され、一般に、性差に関連した指針は示されていない。従来のエビデンスは、実際に診断治療の判断をする場合、十分に信頼に足るエビデンスであろうかなどとってしまうこともある。

本書を紹介するために、上述のような問題点を書いたのは、本書に、従来、切り取られてきていない

側面、呼吸器疾患と性差、特に女性の人生全体の把握に基づいた呼吸器疾患について鳥瞰している姿勢がみられるからである。本書は、臨床、臨床病態、治療、社会的側面などについて、性差の問題を検証しようとしている。生物としての性と社会的存在としての性の両面から問題の方向性を明らかにしようとしている。気管支と肺胞の発生学的、解剖学的な男女間の差異、喫煙をはじめとする種々の外界の刺激に対する感受性の男女間の差異、免疫反応に女性ホルモンが与える影響、女性の一生にみられるホルモンの変化と疾患の関連、薬剤に対する反応性の性差、喫煙率の増加と女性の疾患感受性、気道過敏性、家事に関連する種々の暴露の可能性、職業性喘息などに対する女性の危険性、女性ホルモンと発癌物質とそれによる遺伝子の変化、結核の社会的な側面、女性に特徴的な間質性肺疾患、膠原病の予後に影響する可能性としての性の問題、睡眠に関連した女性特有の問題、肺高血圧の問題と、すべての問題について性差、女性に特徴的な病態と臨床についての知見が考察されている本である。

呼吸器病学を鳥瞰するに、私たちは、別の方法を見いだしたのである。

本書を十分に理解することは、一般診療において、女性に対する問診や所見の把握のしかたに役立つであろう。さらに、女性というキーワードで呼吸器疾患を鳥瞰することから、呼吸器病学のなかで、今後、解明されるべき問題点がより明らかになる可能性がある。今までのエビデンスでは把握しきれていない多くの問題や、その解決のために何をすべきかの予感に満ちた考察を読み取ることができる筈である。

(B5判変型 241頁 定価(£25, ERS 会員無料)
2003年 European Respiratory Society 刊)